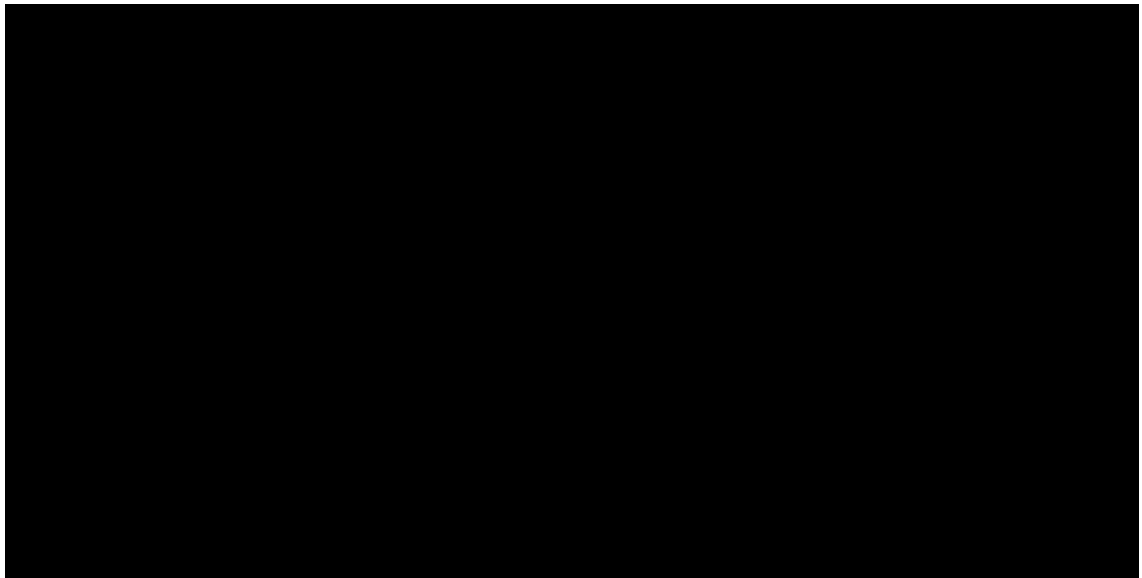


2026 年度 同志社大学大学院 総合政策科学研究科
博士課程(後期課程)外国人留学生入学試験(春期実施)

小論文

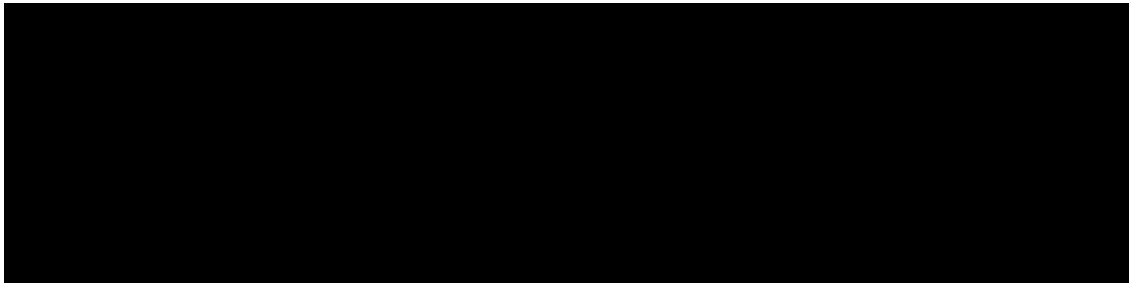
問題 昨今の社会の文脈を鑑みるにつけ、多様化する中におけるにもかかわらず、とりわけ人文知の不在や、不在の偽装を想起させられることが少なくない。そこで、下記に示した①から⑦の文章は、人文知の大切さを訴える点で通底する視点がある。熟読したうえで、三つの設問に答えて下さい。なお、難読と思われる漢字等には、それぞれの文章末にふりがななどを施しました。また、文章②③④につきましては、初出の段階では旧仮名使いと旧漢字が使用されていますが、現代のそれに直してあります。

①



(内田義彦『作品としての社会科学』岩波書店、1981)

②



※訓諭(くんゆ): 教えさとして、理解させること。

※懲憑(しょうよう): 教え勧めること。

(柳田國男『時代ト農政』ちくま文庫(『柳田國男全集 29』1991、初出 1910)

③



(柳田國男『日本の祭』角川ソフィア文庫、2013、初出：1932)

④

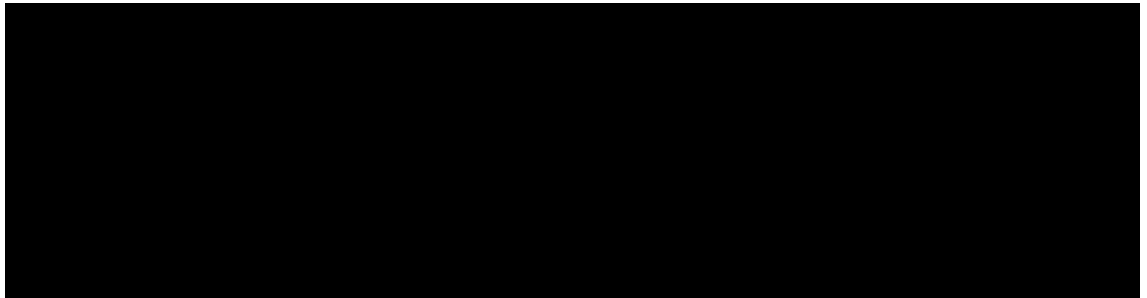


※折口がここでいう「先生」とは、柳田國男のこと。下線および平仮名は原文のママで、folklore のこと。

※俳（おもかげ）：面影と同意。

(折口信夫「先生の学問」中公文庫『折口信夫全集 第16巻』1976、初出：1947)

⑤

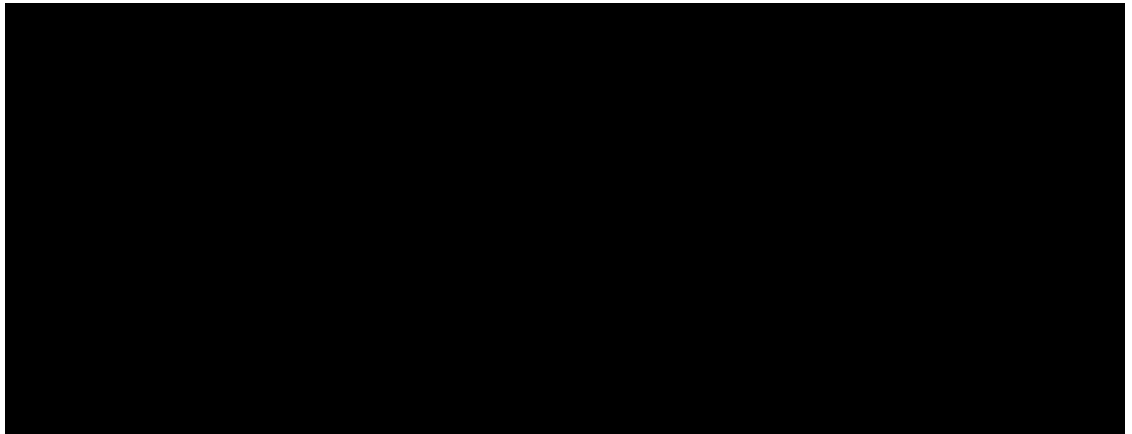


※和讃（わさん）：仏や高僧の教えなどを七五調四句を一連として構成し綴った言葉。

※忽々（そうそう）：慌ただしく行動する様。

(司馬遼太郎『街道をゆく 43 濃尾参州記』朝日新聞社、1996)

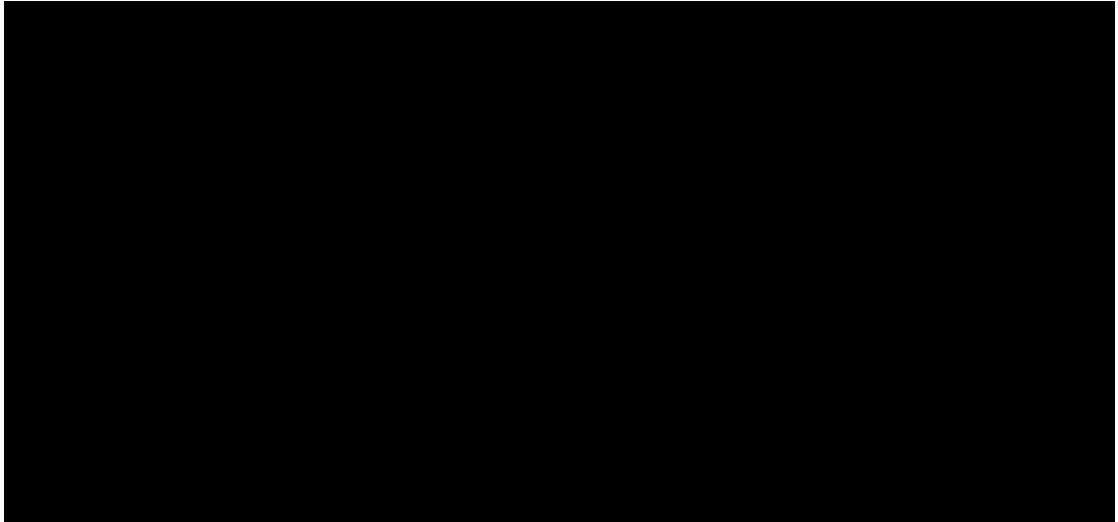
⑥



※蒙を啓く（もうをひらく）：無知と思われる人たちを教え導く行為。

(佐野眞一『宮本常一がみた日本』ちくま文庫、2010、初出：2001)

⑦



(宮本常一『民俗学の旅』講談社学術文庫、1993、初出：1978)

【設問Ⅰ】①および③の文章の読解を通して、下線を施した語句に注目したうえで、「定量的思考と定性的思考」「人文知」の語句を必ず使用して、この二つの文章に対するあなた自身の考えを 300 字以内で記述してください。なお解答に際して、「定量的思考」については、数字による結果を過度なまでに重視することによる弊の危惧を、「定性的思考」については数字以外のものを軽視することなく大切に思考の在り方とその姿勢を念頭に置いて考えてください。

【設問Ⅱ】②および⑤の文章が記されたのは、90 年近い隔たりがあります。また、⑤と現在においては 30 年近い隔たりがあります。しかしその 90 年と 30 年という隔たりの中でおそらく変わらないものがあります。⑤の下線部に注目しながら、その隔たりのなさがあるとすればその理由をいかに考えるべきか、「まちづくり」という視点について現代的文脈を踏まえながら 300 字以内で記述してください。

【設問Ⅲ】⑥および⑦の文章の読解を通して、ともすれば上から目線となりがちな啓蒙的思考の弊について、400 字以内で記述してください。